

# 金門島の砲弾鋼刀

——国共内戦戦跡のしたたかな名産品——

武 井 基 晃

# 金門島の砲弾鋼刀

## ——国共内戦戦跡のしたたかな名産品——

武 井 基 晃

### 1. 戦跡観光地と土産物が有する文脈

昨今、観光地化・観光資源化の名の下に、様々な事物・事象が観光の対象として発見されるに至っている。観光地化・観光資源化において、必要なものの1つに文脈・物語性がある。単に美味しかったり良いものであったりするだけでなく、その観光地と文脈を共有していれば、観光客にとってその商品の魅力はさらに高まる。対象物の価値を高め魅力を伝える文脈・物語が受け容れられたとき、人々は観光客としてそれを求めるようになり、こうして観光資源化は成立し売れる名産品となるのである<sup>1</sup>。

本稿で考察の対象とするのは、観光地の中でも、戦跡観光・戦地観光である。観光地化した戦跡では、訪問した人々のはかつてそこで行われた戦闘・戦争を、その痕跡を目撃することで感じ取り、疑似体験し、そして過去の戦争を反省して今日と将来の平和に思いを馳せる。歴史教育・平和教育のための観光であり、その成立には戦争の過去と平和の今日を結ぶ文脈が不可欠である。それでは、戦争・戦跡と土産物は直結するのだろうか。するとしたらどのようなかたちであろうか<sup>2</sup>。

戦跡観光と土産品の購買促進はそもそも直結しにくい面があり、こうした観光地で、訪れた観光客たちに消費をうながすのは難しいと考えられる。もちろん戦跡周辺にも土産物屋は建っている（例えば、沖縄県のひめゆりの塔周辺には観光客や修学旅行生を当て込んだ土産物店が軒を連ねている）が、そうした店でそれなりのものが売られていたとしても、実のところその多くは戦争の当時や戦跡とは関係のない商品である。そもそも戦時は生産生活も軍事中心となり、戦争に関連して成立して今日につながる名産品となるとかなり限られてくる。

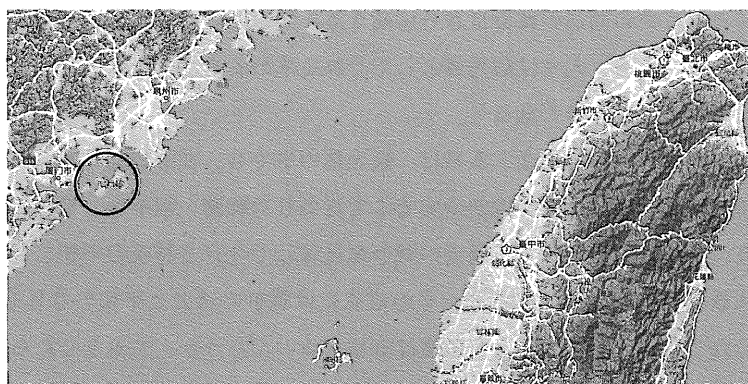
戦争・戦跡と結びついて生じ、戦争の文脈を有するその価値を受け容れられ、消費者・観光客に好まれる名産品・土産物にはどのようなものがあるだろうか。あえて戦跡と商品を直結させ、ちなんだ商品を売り出すためには、その商品の開発においても、それを売り出す際においてもそれなりの「したたかさ」が必須である。

その実例として本稿では、台湾領の金門島の戦跡観光と、当地の名産品とされている砲彈鋼刀（金門菜刀、金門包丁）について報告する。国共内戦時に中国軍から撃ち込まれた砲彈（ミサイル）を、今日台湾領で包丁・ナイフ類という日用品に加工して販売するというしたたかでストレートな文脈が、この金門鋼刀の観光名産品としての魅力の第一義である。戦跡観光地において撃ち込まれた砲彈を原材料にした包丁が著名となり、しかも撃ち込んだ側である中国大陆からの観光客も喜んで買って帰るという戦跡の名産品について、その歴史的背景を整理しながら論じることを目的とする。

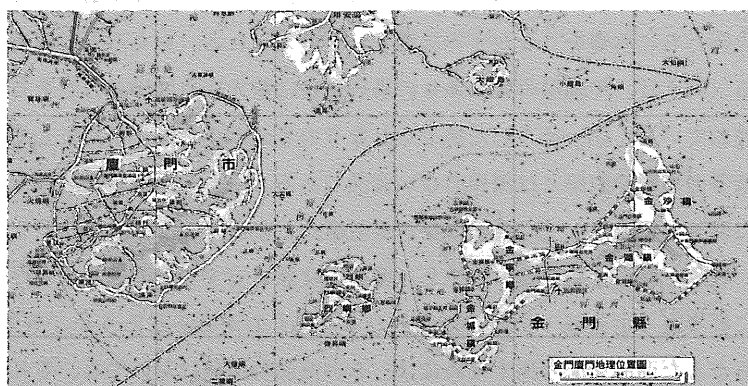
## 2. 金門島の戦中・戦後史概略

本稿の対象地域は、福建省アモイ（厦門）沖にありながら、台湾領となっている金門島と小金門（烈嶼）等の島々からなる金門県である（地図1・2）。県の面積は153平方キロメートル（中国が管轄する島々を含まず）で、県政府の統計によると人口は13万6812人・39825戸（民国106年＝2017年9月現在）で

ある。ただし、金門県在籍者には特典（飛行機運賃の割引など）があるため、実際の在住人口は約7万人未満だとする見方もある〔林 2014 72〕。この島の土産品としての人気商品は高粱酒と包丁（砲彈鋼刀）で、特に前者の利益を金門県政府は福祉に回し「中秋節や春節（旧正月）には20歳以上の成人1人あたり12本の高粱酒を無料配付している」〔迫田 2011 80-81〕。写真1は2017年（民国106年）の中秋節（旧暦8月）に島内のある集落の集会



地図1 金門島の位置（Google マップより作成）



地図2 金門厦門地理位置図（金門県観光處提供をもとに作成）

所で配付されていた高粱酒の箱で、箱には他に端午節（旧暦5月）・春節（旧暦1月）の欄が設けられている。

この金門島の、地域研究の対象としての特性を整理して論じた川島真によると、金門という地域が今日までの歴史を経て有している「歴史に裏打ちされた個性」には、「僑郷」（＝華僑を輩出した故郷）と、「軍事最前線の島」の2つがある〔川島 2011 8-12〕。近世以来長らくに渡って、各地に海外移民を送り出していたという前者の金門の性格は、後者によって失われることとなり、戒厳令が解除された後においても金門が戦前のように「僑郷に回帰する」ということはなかった」のだが、「島内人口が10万弱であるのに対して台湾を含めた金門島以外の金門出身者が70万を数えるという、そのコミュニティの広がり、金門社会にひとつの可能性を与えたことは言をまたない」〔川島 2011 10〕。

以下ごく簡単に、台湾（中華民国）に属した福建省の金門が経験してきた歴史を概観しよう。

戦時中、1937年から1945年の8年間、金門島とその一帯は日本軍による占領を経験した。ただし、戦前・戦中の台湾島とは異なって、植民地化までに至ることはなかった。このことは今日、台湾政府＝中華民国政府下において、台湾と金門との歴史上の経験の違いの一端となっている。

第二次大戦後の国共内戦において内戦の最前線となって以来、金門島は台湾にある中華民国政府下にある。1949年、台湾での戒厳令がしかれた年には、金門島北西部で古寧頭戦役<sup>3</sup>が起き、中華人民共和国側の奇襲攻撃・上陸作戦が失敗に終わっている。

その後、1956年までに島全体の軍事拠点化が進められ、台湾から万人単位で軍人が駐留することとなった。このことは金門島の生活そのものを大きく変化させたとされる。軍に依存した、あるいは軍を対象とした経済活動が島の生活の中心となったことがその大きな原因である。

当時の金門島の経験の中で、何よりも特徴的なのは、1958年8月23日から10月5日まで続いた、中国人民解放軍による金門に対しての「823砲戦」である<sup>4</sup>。このとき「中華人民共和国側から数十万発の砲弾が金門島に降り注いだ。これにより島の基本生活は破壊され、建築物なども砲弾が届きにくかった一部を除いて破壊された。この時もたらされた砲弾は、島の包丁産業を支える材料となったというが、島の受けた被害は甚大であった」〔川島 2011 11〕。その後、砲撃は1978年まで20年間にわたって続いたが、その砲撃はほぼ隔日で行われ、つまり砲撃のある日が事前に分かるというものだった。「金門に対する砲撃は次第に形式化し、戦闘の重点はラジオ放送や火薬の代わりに宣伝ビラを詰めた宣伝弾などを利用した心理戦へと移行し」、「奇数日にまばらな砲撃がなされたのみであった」〔福田 2013 206〕。



写真1

1992年の台湾における戒厳令の解除以降は、金門の軍政も解かれ、台湾と金門島間の往来が活発になった。1995年には金門は国立公園（戦争遺跡および伝統的集落）に指定された〔林 2014 62〕。さらに2010年には、金門の「戦地文化」が台湾政府文化部の「世界遺産登録推薦地域」の1つに選定されている〔林 2014 62〕。このように、金門に残る戦争遺跡や戦争文化は近年、台湾において内外にアピールされてきた。この間の中台間の交流を簡潔にまとめると、陳水扁（民進党）政権下の2001年1月から、アモイ（廈門）と金門島間で客船が限定的に運航された。この政策を「小三通」（三通とは通称・通航・通郵を指す）といい、最初は親族訪問など期限付きでの交流が許されたものだったが、台湾本島に先駆けての実施だったため、台湾各地から金門島への空路も運航された。その後、中国との関係を重視する馬英九（国民党）政権下の2008年からは中国からの一般観光客の来訪も自由化された。

上水流久彦は、中華民国の台湾化（中華民国と、台湾島を中心とした台湾社会の同一視）が進む中で、「福建省の金門の存在は台湾省以外を統治しているという点で中華民国には重要」である反面、「金門は逆に台湾アイデンティティに基づく国家には不要」という二極の理解があることを指摘している〔上水流 2017 66〕。上水流は、この矛盾に加え、金門アイデンティティ（戦争体験や、福建省としての金門という意識など）をめぐる世代間の分裂、そして金門の存在価値が台湾社会の歴史認識において希薄化しつつあることを金門研究の3つの課題として提示する〔上水流 2017 67、81〕。そして、中華民国の台湾化下において金門島に対しては、「特殊性を無視した包摂」（金門の歴史性等が考慮されずに台湾社会に含まれる）と、「特殊性による排除」（金門の持つ政治性は台湾社会と異なり、極端に言えば新たな国体には必要ない）という、相反する2つの認識が併存していることを見出している〔上水流 2017 72-73〕。

さらに上水流は金門への認識について学生から70歳代までの様々な世代に対するインタビューで明らかにしているが、特に若い世代は823砲戦について知識としては知っていて金門と戦争を結びつける認識はあるものの「それが現在の国家のありようにどう関係しているかまでは、思い至らない」上に、メディアやネットの発展によって270キロメートルの物理的距離を越えて「台湾島のみならず、金門も含む」生活世界が成立し実感されるようになったとする〔上水流 2017 83〕。

### 3. 今日の金門の戦跡観光

2010年に就航した高速船ではアモイ・金門間は30分で行き来ができ、「金門島の税関の統計では、01年の中国人観光客は2万1300人だったが、10年は137万9600人」まで増加した〔迫田 2011 80-81〕。「金門、中国大陆の大型連休でうれしい悲鳴 8日間に約1万6千人来訪」という最近の記事によると、「平素金門を訪れる中国大陆籍観光客は1日当たり1000人に満たない」（金

門観光特産協会) ところ、2017 年 10 月 1 日に「小三通を使って金門入りした中国大陸籍観光客は 4164 人で、1 日当たりの中国大陸籍入境者数としては過去最多を記録。続く 2 日も 4020 人が入境」(移民署金門県行政センター) した。同年 10 月 1 日～8 日の中国大陸の大型連休中に「小三通」ルートで金門県に入った中国大陸籍観光客は、1 万 6542 人(内政部移民署の統計)に達し、「地元のショッピングセンターや免税店、民宿、レンタカーなどの旅行関連業界はこの盛況ぶりにうれしい悲鳴を上げた」(2017 年 10 月 11 日 16 時 30 分配信 <http://mjapan.cna.com.tw/news/asoc/201710110005.aspx>。黄慧敏／塚越西穂)。

金門島の歴史遺産には、伝統建造物群、近代建築、戦争遺跡という 3 つの異なる時代のものがある。そのうち、戦争遺跡・戦争遺産は、①軍事施設(坑道・トンネル(写真 2-1～2)・病院・軍営・バンカー(掩体壕)・観測所など)、②集落内の軍事遺跡(「軍事消費市街」・映画館・民家の壁に残されたスローガン・軌條砦(海岸からの上陸を防ぐ設備。写真 3) など)、③記念性の施設(戦史館(写真 4)・記念碑など(写真 5)) の 3 種類に大別される〔林 2014 68〕。

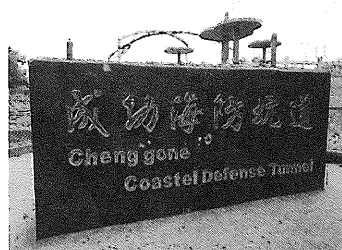


写真 2-1

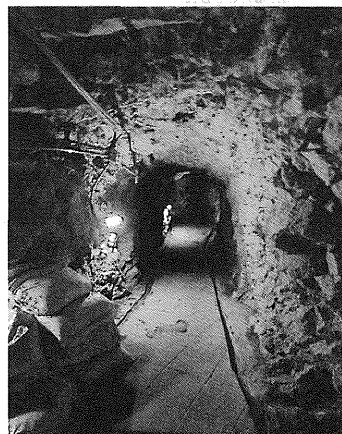


写真 2-2



写真 3



写真 4

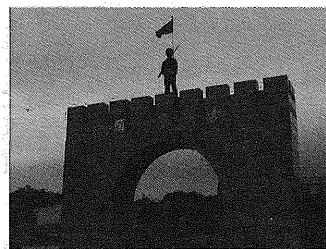


写真 5

実際の砲陣地(獅山砲陣地)内での砲弾体操(砲弾の運搬・装填・点火などの動き(写真 6-1～3))の実演などが企画されているが、これに対して林美吟は「教育より娯楽の効果が大きく、戦争に対しての反省の不足などの課題もある」といい、「全体像を把握しないまま、観光や実用性を目的としたケース・バイ・ケースの活用により歴史遺産のオーセンティシティー(真実性)が失われた」ことを指摘している〔林 2014 69〕。また、戦争遺跡の観光地化が進む状況について上水流は、現地調査で「当時の生活は観光化された施設だけではよくわからない」という 50 歳代のタクシー運転手の声を得て、「中国人民解放軍の攻撃に日々脅え、生活が制

限された経験」が伝わっていないことに対する上の世代のあきらめを聞き取っている〔上水流 2017 83〕。



写真 6-1



写真 6-2

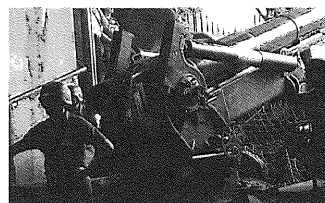


写真 6-3

金門の戦争遺跡を以下にいくつか紹介しよう。金門島の北側の断崖、つまり大陸に近い位置には建物のような大きさのスピーカー「北山播音牆」（写真 7）がある。「心戦牆」とも称し、金門島から大陸に向けて、メッセージが流されていた（テレサ・テン（鄧麗君）による「大陸同胞」への呼びかけがなされたこともあった）。また、1949 年の古寧頭戦役の傷跡を今に伝えるものに「北山古厝」があり、壁に弾痕が残る民家群が保存され、史跡として観光名所にもなっている（写真 8-1～2）。このほか、島

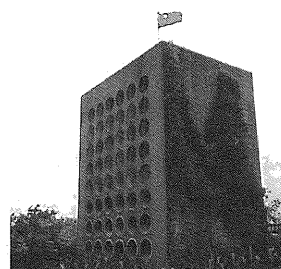


写真 7

内各所の軍事施設周辺には戦車などの兵器が展示（写真 9-1～2）され、また島内の地下に張り巡らされた坑道は公開され見学が可能である。市街地の金城鎮にある代表的な坑道には「金城民防坑道展示館」があり、ここでは日に数回の坑道見学ツアーが組まれている。案内の途中、灯り 1 つない中で空爆を再現した音声 that 流れるエリアなどがあり体験型の展示が試みられている。



写真 8-1

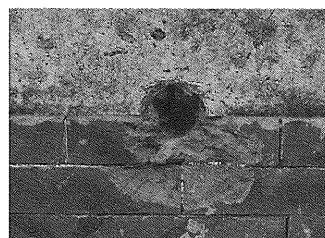


写真 8-2



写真 9-1



写真 9-2

#### 4. 金門島の砲弾鋼刀

##### (1) 砲弾から鋼刀の加工過程

以下では、戦争・戦跡と結びついて生じ、戦争の文脈を有する価値を受け容れられた、したたかな名産品の実例として、中国軍から撃ち込まれた砲弾（ミサイル）を原材料にした鋼刀（包丁）について報告する。

もともと金門島には他の村落と同様、生活必需品である鉄道具を加工・販売・修理する鍛冶職人（打鐵鋪・鐵匠爐）がいた。工業がまだ発達していなかった時代には、そうした職人が農業で使う鋤など、料理人が使う包丁、裁縫に使うはさみなど多くの生活用品を作っており、金門県の金城鎮にも以前から「金永利」「金合利」「正利」などの店舗があったが、『金城鎮誌』には「金合利」は炉の火を止めている（『金合利』則處停爐熄火狀態）と記されている〔金門県金門学研究会編 2009 470〕。ただし町の鍛冶屋としては営業していないものの、この金合利は砲弾から作り出す鋼刀を主要商品として営業を続け、金門島観光の一翼を担っている。

金合利の工場の施設内には、鋼刀（菜刀、ナイフなど）の材料となる砲弾の外殻が積み上げられている（写真 10-1 ～ 2）。

砲弾から鋼刀を作り出す工程を、写真 11 に沿って示すと次の通りである。

- ① 砲弾から鋼刀に加工するための金属片を切り出す（写真 11-1）。
- ② その金属片を炉で熱して（写真 11-2）、赤いうちに電動のハンマーで何回も叩くことで鋼刀のかたちにしていく（写真 11-3 ～ 4）。

- ③ 加工のために、再び炉で熱する（写真 11-5）。

- ④ 電動の研磨機材で繰り返し研ぎ、かたちと切れ味を整える（写真 11-6 ～ 7）。

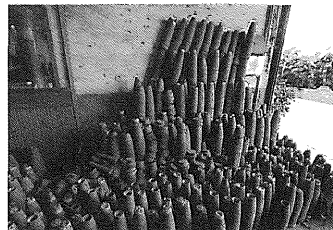


写真 10-1



写真 10-2



写真 11-1

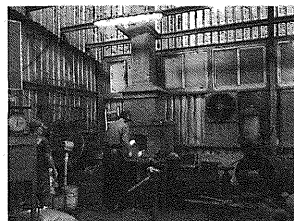


写真 11-2



写真 11-3

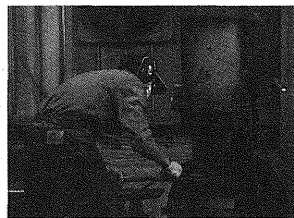


写真 11-4



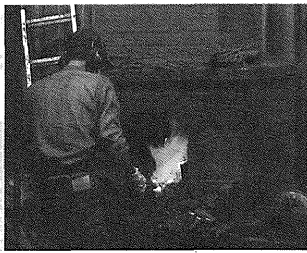


写真 11-5

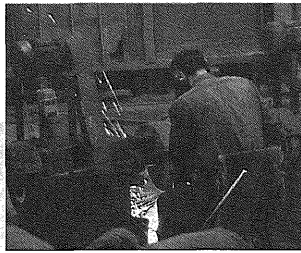


写真 11-6

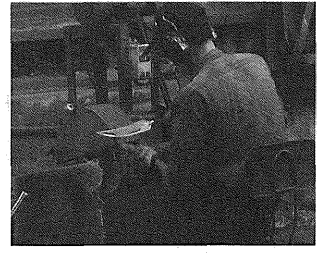


写真 11-7

⑤出来上がった鋼刀の刃を固定し、ハンマーで叩いて柄を取り付ける（写真 11-8）。

以上の工程をほんの数分で行い、その様子は店舗を訪れた観光客にも公開されている。商品展開は各種の包丁やナイフ、鉋などで、実用的なものもあれば、意匠を凝らしたものなど様々である。

## (2) 呉師傅へのインタビュー

「金合利鋼刀」の3代目・呉師傅（Maestro WU こと呉増棟氏。1957年生）によると、呉家の打鐵鋪は823 砲戦以前の父の代から、第二次大戦時で残された砲弾（500 ポンド＝約 227 キログラムと伝えられる）を材料として鋼刀などを作っていた。

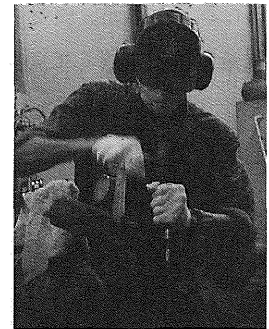


写真 11-8

その後、1958 年の 823 砲戦の時期に 47 万発の砲弾が撃ち込まれた際には、最初はその着弾して裂けた砲弾の鋼材の破片を拾い集めてきて、使える部分を材料にして研ぐなどの加工をして鋤・鎌といった農具を作るようになった。呉師傅は、廃物利用は使えるものなら何でも使う、鋼でも鉄でも当時の農業社会ではすべて貴重なものだったと語る。

そこからさらに 1958 年から 1978 年の「單打雙不打」（中国軍から隔日での砲撃が続いた）の時期になると、撃ち込まれてくるものが同じ砲弾でも異なってきた。飛んでくる砲弾は攻撃目的ではなく、内蔵した發傳單（中国軍からの宣伝ビラ<sup>5)</sup>）を飛ばして送ることを目的とした宣伝弾が主となっていたため、充填される火薬量は砲弾の推進に必要な量だけで少なくなっていた。その結果、砲弾が着弾後に破碎することなくなったために、比較的完全なかたちで材料としての砲弾が残り、手に入るようになった。

今日、鋼刀の材料に用いられている砲弾は、まさにこの時代に撃ち込まれたものである。ただし、当時撃ち込まれて飛んできた砲弾の多くは、その推進力・回転力によって地中深く埋もれてしまったため、当時から容易に回収することはできなかった。それが近年、金門島内でも建設・開発が急激に進んだことにより、その過程で多くの砲弾が掘り出され、回収できるようになった。当時は中国軍からの宣伝を目的としていたため、金門各地にまんべんなく撃ち込まれたので、ま

だまだ島内の地中には「鋼刀の材料」が大量に埋蔵されているのである。さらに砲弾から鋼刀・ナイフ類とする金属片を切り出す金属加工の機材と技術も向上していった。

呉師傅の技術習得は、1970年頃のこどもの頃から家で作業をかたわらで見ながら学んだもので、だんだんと身に付いていったとのことである。1983年に家業を継ぎさらに1992年に金門の軍政が解除されると、金合利の爆弾鋼刀は観光の名産品として注目を浴び始めることとなった。

呉師傅によると、技術は時間とともに進歩するので、常に修行期間は続いており、この社会で生き残っていくためには、挑戦を続け自分の技術を精進し続けなければならない。また一製造者からすると、1本の鋼刀を作るだけなら容易だが、1本の良い鋼刀を作るとなると決して簡単ではないと語る。さらに彼は、伝統産業といえども、新たなものを作り出さなければすぐに斜陽産業となってしまうと考えているのである。呉師傅は3代目だが、彼の息子もこの技術を習得し始めており、さらに3～4名の弟子たちも学んでいる。

顧客の変遷について、もともと住民の一般的な生活用具から作り始めたが、大量の国民党軍が台湾から来て常駐するようになった当時は、生活物資の需要が増えて鋤・鋼刀の需要も大量に増加した。それが近年、金門島をめぐる状況が大きく変わってからは、観光客やコレクターが好んで来るようになったので、最近の商品は生活用品だけでなく、工芸的な意匠を凝らした刀製品が少しずつ増えてきている。最近の観光客は欧米からの人もいるし、さらには大陸からの旅行者が最も多くを占めるようになっている。

筆者の取材時も、「金合利鋼刀」の工場兼売り場には、欧米人をはじめとする多くの観光客がバスで乗り付けてきており、そして既述の通りの呉師傅らによる鋼刀製作の実演を見学していた。目の前でミサイルがナイフになっていくプロセスは、この砲弾鋼刀が内包する歴史の物語性・文脈を雄弁に主張する。観光客はこれを目の当たりにし、その文脈とともにこのナイフ・包丁を購入していくのである。

## 5. 戦地のしたたかな名産品

今日の台湾領金門島で、かつて中国軍から国共内戦時に撃ち込まれた砲弾を原材料として包丁に加工した金門鋼刀という観光名産品について、その背景となっている金門島の戦中・戦後史の概略と、今日の戦跡観光という現況と合わせて論述した。戦争・戦跡と結びついて生じた名産品が、戦争の文脈とストレートに結びつく戦跡観光において、その価値を消費者・観光客に受け容れられている実例として位置づけるためである。

金門鋼刀が有するしたたかさは、そもそもの起源に由来するものだった。戦後から国共内戦時の物資が不足していた時期に砲弾の金属から日用品を作るという、生きて暮らしていくための戦後の島民のしたたかさがその始まりにある。それが名産品として注目されたのは、戒嚴令が解除

されて以降、戦地であり内戦の最前線であるという金門島の性格がいったん薄れ、戦跡・戦争遺跡を通して平和を考える「戦争文化」の観光地として転換を果たしていった過程においてだった。

大戦後から内戦中という物資困窮時の非常手段・代替品だったはずの砲弾生まれの包丁が、今日においても魅力的な名産品と見なされ観光客に売られている<sup>6</sup>のは、金門島が経験し今日観光地として主張する歴史と直截的に合致する文脈を砲弾鋼刀が内包しているからである。そうした点を発見され名産品として受容されたのであり、その位置取りにもやはりしたたかな戦略が見受けられる。

観光客は金門鋼刀を、それが有する文脈ごと購入しているのである。観光資源化の過程で、文脈が事物・事象において結実することについて今後も考察する必要がある。

## 参考文献

- 上水流久彦 2017「中華民国の台湾化にみる金門の位置づけに関する一考察」『アジア社会文化研究』18
- 川島真 2011「地域研究の対象としての金門島」『地域研究』11-1
- 金門県金門学研究会編 2009『金城鎮誌』金門県金城鎮公所
- 迫田勝敏 2011「金門島現地ルポ 高粱酒、包丁の島から中国人向け観光の島へ」『週刊東洋経済』6349
- 福田円 2013『中国外交と台湾―「一つの中国」原則の起源』慶應義塾大学出版会
- 林美吟 2014「金門における歴史遺産の保護およびヘリテージツーリズム」『観光科学』6

## 注

- 1 しかしその一方で、観光地化が進んだと見受けられる地域においても、観光客は来るものの、それが肝心の消費に結びつかない実情への不満が聞かれることがある。たとえば日帰りの観光地や次の目的地への通過点と見なされ観光客が宿泊も食事もしないとすると、そこでの消費額は伸びない。また、ある民俗芸能や祭礼が観光資源として喧伝され、多くの客を呼んだところで、入場料を取るわけでもなければ、その民俗芸能や祭礼の担い手である団体にとっては注目を浴びた以外の利益に結びつかない。にもかかわらず、観光の目玉としてイベントなど本来の出番以外の機会にも芸能の披露を求められ、自己負担で駆けつける団体は各地にいる。
- 2 例えば、やや脱線するが、自衛隊の関連施設では、キューピー人形が売られている。茨城県の予科練記念館で売られている「同期の桜キューピー」という白い制服に身を包んだ程度ならまだ受容されているようだが、過去には別の自衛隊施設で人間魚雷（回天）とキューピーを融合させた商品が売られ、不謹慎と批判されて販売停止となったことがあった。
- 3 1949（民国38）年10月25日の「古寧頭戦役」は、約2万8000人の中国軍（共軍）が瀨口・

古寧頭地区から強行上陸を試みたが、2 日間に及ぶ激戦の末、中国軍は殲滅され、7000 人が捕虜となり、多くの武器弾薬が押収された（「共軍四師、約 2 萬 8000 餘人於嶼口、古寧頭地區強行登陸、與我守軍激戰兩晝一夜、共軍全部被殲、被俘 7000 餘人、並擄獲武器彈藥甚夥」）〔金門県金門学研究会編 2009 49〕。

- 4 福田円によると、1950 年代の中華人民共和国の指導者たちにとって、金門・馬祖など福建省沿海の島々を、国民党軍から早期「解放」することは台湾・澎湖諸島の「解放」に先行するものとして位置づけられていた。「その現れが一九五八年の金門砲撃・封鎖作戦であるが、同作戦は軍事的には失敗し、政治的にも当初の目的を達成することができたとはいいい難かった」。その後「国際世論は、中国政府と国府を対等な主体と見なし、台湾海峡における停戦交渉を呼びかけていった」のだが、中国政府にとってこの「二つの中国」を前提とした停戦は受け入れがたく、「長期的な将来において、台湾・澎湖・金門・馬祖を一括して「解放」するための努力を継続する」ことなどを選択した〔福田 2013 348-350〕。
- 5 宣伝ビラは、金門に駐留する国府軍に対して投降を呼びかけるもので、「金門蔣軍四面被圍 要求生路只有投降」（金門の蒋介石軍は四方を囲まれている 生き残るためには投降しかない）〔福田 2013 150〕と書かれたものや、「1950 年代に解放軍に投降した元国府軍兵士が大陸で家庭を築き、人民公社に参加してさらに幸福になったと宣伝」〔福田 2013 208〕するものなどがあつた。
- 6 筆者が調査中に受けた印象ではあるが、金門島の現地の人で砲弾鋼刀を使用する人は多くはないようである。行き来のままならなかった軍政時代と比べると流通は改善され、今日ではもっと安価で使いやすい包丁が売られているからである。さらにある男性（1943 年生）によると、鋼の刃は研ぎにくい（「不好去磨」）ことが砲弾鋼刀の欠点であるという。むかしの人は打鐵舗に鋼材を持って行って包丁を打ってもらっていたが、当時の打鐵舗は鉄も用いて「包鋼的方式」の包丁（鋼と鉄を合わせた日本の和包丁の「合わせ包丁」と同じ構造と考えられ、研ぎ直しができることが利点）も作れたという。砲弾鋼刀は単一の素材（鋼）から研ぎ出しただけの構造なので、研ぎ直しなどのメンテナンスがしにくいとされる。

本稿は国際 work shop「冷戦構造下、台湾海峡金門・馬祖島の歴史・民俗的研究」（2017 年 12 月 9 日 於 筑波大学。日本学術振興会科学研究費基盤（C）「台湾海峡金門島・馬祖島から読み解く近現代東アジアの社会変動」研究代表者山本真）における発表「金門島の砲弾鋼刀」（中国語）を元にしたものである。